文化財をたずねて

No. 19

新田・木生谷地区の文化財めぐり

発行　赤穂市教育委員会
編集　生涯学習課文化財係
（赤穂市加里屋81　TEL 43-6962）

新田はもと海辺の沼地であったが、正保２年（1645）に浅野長直が赤穂に入封した後、水田を増やすために埋立て造成した地である。正保３年（1646）から５年間かけて約95町歩（約94ha）の水田を造成した。埋立てに鳥撫村戸嶋の土を用いたことから、はじめ戸嶋新田村と呼ばれたが、宝暦年間（1751～1764）から新田村と略称されるようになった。

一方の木生谷はもと海岸沿いの木が生い茂った谷であり、中世のある時点における住人はわずかに３戸、慶長14年（1609）の池田輝政による検地の際には18戸であった。一説には江戸時代の初め頃薩摩浪士が帰農を志してこの地を訪れ、折方村の住民７戸を引き連れて山畑を開いて作った村であると伝えられている。

①日吉神社

①日吉神社

新田の造成により住民が定着したため、承応元年（1652）に藩主浅野長直が、五穀豊穣を祈って近江の山王大権現宮（日吉大社）を勧請し、田３反（約30a）を寄進したのが起こりである。祭神は大山咋神・香山戸神・羽山戸神。宝永３年（1706）に赤穂に入封した藩主森長直が、宝永７年（1710）に本殿・拝殿・鳥居等の再興を行った。８代森忠哲は特に信仰篤く、幣殿・拝殿を改修したほか、頻繁に参詣し、神社前に馬繋場を設けた（現在はない）。明治元年（1868）神仏分離令により「山王権現神社」を日吉神社に改称した。昭和６年（1931）に村社より郷社に昇格したが、昭和20年（1945）の神道指令により、社格廃止となった。境内に稲荷神社・天満宮・水神社が合祀されている。

②三宅家屋敷跡

②三宅家屋敷跡

新田組の大庄屋は、新田以西の新田・大津・木生谷・折方・鳥撫・眞木の６ヶ村を束ねて指導監督する村役人でもあった。大庄屋は知識・行政能力・人望に優れ、経済的余裕があることが必要であり、江戸時代前期に木生谷村の三宅源兵衛貞政が任命された。次の又兵衛の代の貞享３年（1686）になると、三宅家は地域を監督するのに便利な新田に移住し、幕末まで約200年余り、この地で９代にわたって新田組大庄屋を務めた。

③以良羅山

③以良羅山

この山は古くから「イララ山」と呼ばれている。古代の朝鮮語で「ラ」は津・港の意味があり、「ララ」は津渡、イは場所の意味であるという。これによるとイララは津を渡る場所という意味になる。この山から大津船渡へ船で渡ったため朝鮮からの渡来人によってこう呼ばれたのではないかと考えられている。山頂には大正13年（1924）に塩屋村在郷軍人会によって建てられた忠魂碑があり、戦没した246名の霊を祀っている。碑文は東郷平八郎の筆によるものである。また、昭和27年（1952）、昭和44年（1969）に設置された２基の緊急用上水貯水タンクが設置されていたが、役目を果たしたので平成19年（2007）に撤去された。なお、この山一帯は**昭和45年（1970）に風致地区に指定**されている。

④居村観音

④居村観音

新田居村の山裾に石仏が祀られている。江戸時代の末期頃、眼病に悩まされていた旅人が井戸水で眼を洗ったところ治癒した。このため感謝の気持ちを込めて井戸の傍らに建立したものであると伝えられる。以後、土地の人々はこの石仏を眼病に効く「地蔵」として祀ったが、昭和28年(1953)、堂宇の改修にあたって調査をしたところ、地蔵菩薩像ではなく観音菩薩像であることが判明した。毎年４月18日には信者一同が集まり法要を営んでいる。

⑤戸嶋山光浄寺

⑤戸嶋山光浄寺

干拓により、慶安３年(1650)新田居村、明暦３年(1657)五軒家、寛文５年(1665)十五軒家、七軒家ができた。これに伴って移住者が定住し、寺が必要となった。このため享保21年(1736)に萬福寺(浄土真宗)に願い出て、藩庁の許可を得た翌元文２年(1737)萬福寺の寺家であった光浄寺を移して入仏したのが起こりである。その後東本願寺から親鸞聖人・聖徳太子・七高僧・蓮如上人等の御絵像を下賜され祀っている。なお、この寺では江戸時代中期の寛政年間頃(1789～1801)に、新田村を作った藩主、**浅野長直・長友・長矩の木像**を作って安置し、以来毎年長直の命日である８月24日に法要を営んでいる。この木像はいずれも**平成７年(1995)５月25日に市の有形文化財に指定**された。現在寺は無住で、地区住民中より総代役員等を選出して管理運営を行っている。

⑥戸嶋用水路

浅野長直により新たに水田が造成され、水を確保する必要が生じた。これより前の元和２年(1616)代官垂水半左衛門によって切山(高雄)

に隧道が造られ、目坂・浜市・砂子を経て、山崎山の下より城下へ給水する赤穂上水道が設けられていた。浅野藩ではこれを利用し、山崎山の下に戸嶋枡を設けて分岐し、加里屋・塩屋・戸嶋新田に灌漑水路を造って導水した。これにより184町9反5畝(約185ha)の灌漑用水がまかなわれたほか、新田居村地区の生活用水としても利用された。水田用水としては今もなお役目を果たしている。大正2年(1913)から鷸和地区に余水を送水しており、当初は大津川の底に土管を入れて送水していたが、土管の破損のため、平成3年(1991)からは水管橋を渡し送水している。

⑦新田居村の道標

⑦新田居村の道標

新田居村の光浄寺の西に石の道標がある。「左　はま遍(浜辺)道　右　ひせん(備前)道」と刻まれている。いつ頃のものか不明であるが、ここから左の道を行けば塩田・浜に至り、右に行けば大津を経て備前に至ることを示している。

⑧五軒家地蔵

⑧五軒家地蔵

昔大津川にかかる橋が流され、水害の根絶を願って建てられた地蔵である。後にこの地蔵の前に陽根の形をした石が置かれ、触れると子を授かると言われ、「子授け地蔵」として信仰された。

⑨西灘小学校跡

⑨西灘小学校跡

明治5年(1872)に国民皆学を目指して明治政府より学制が発布され、新田・大津・木生谷・折方・鳥撫・眞木の各村は、暫定的に民家や寺を借りて6つの小学校を設けた。明治9年(1876)にこれらを統合し、中間地である新田十五軒家に西灘小学校として開校した。以後、西灘分校、木生谷簡易小学校、木生谷尋常小学校と名称を変えたが、校舎が手狭になったため、明治36年(1903)木生谷三昧下に移転した。

⑩十五軒家地蔵

⑩十五軒家地蔵

大津川の左岸の土手の上に安置されている。安政4年(1857)の銘があり、いつの頃からか、歯痛に効くとされ、「歯の地蔵さん」として信仰を集めている。

⑪七軒家地蔵

かつて大津川改修工事が行われた際、川底に光るものがあり、村の若者が潜ってみると、一体の地蔵が新田の七軒家の方を向いて埋まっていた。これを引き上げて堂を建てて安置し、村の守り本尊としたが、まもなく村に大火事があった。村人は、水の中にいた地蔵さんが、陸に揚げられて暑くて怒ったのだろうということで、堂を取り外した。以降七軒家に火事は起らなくなったという。今では「屋根なし地蔵」「目の地蔵」として親しまれている。寛政11年(1799)の銘がある。

⑪七軒家地蔵

⑫木生谷尋常小学校跡

十五軒家の木生谷尋常小学校が児童数に対して教室が狭いので、増設するよう県の指導を受け、明治36年(1903)この地に和洋折衷平屋建の学校を建設し移転した。敷地面積942坪(3,114㎡)、校舎面積97.5坪(322㎡)であった。しかし明治40年(1907)に塩屋尋常高等小学校の分校となり、5年生以上は塩屋小学校に通い、尋常科4年生までとなった。明治43年(1910)塩屋小学校に統合されて閉校した。

⑬村中地蔵

⑭木生谷（三宝）荒神社

⑮潜龍山専法寺

⑯流月庵

⑱猪垣

⑬村中地蔵

かつて流月庵に大小２体の地蔵があり、夫婦地蔵と呼ばれていた。その後、木生谷に地蔵がないことを憂いた庵主が「歴世塔」と刻まれた墓石を台座とし、大きい方の地蔵を与えたのがこの地蔵である。木生谷橋のたもとに祀られていたが、大津川の改修にともない、昭和46年(1971)現在地に移転した。片膝を立て、右手に錫杖、左手に宝珠を持った姿で鎮座する。

⑭木生谷(三宝)荒神社

この神社は正保元年(1644)に折方村の荒神社を勧進して創建された。祭神は素盞嗚命。勧進にあたって御神体を捜していた頃、村の庄屋と与平という男が折方村の荒神社に参詣した。その帰りに２人の前を歩みに合わせて転がる石があり、まるで生きているような霊石であるとして、村民一同の賛同を得て御神体にしたという。拝殿には江戸後期に活躍した絵師法橋義信の**四十七義士画像図絵馬**が掲げられており、**平成８年(1996)３月29日に市の有形文化財に指定**された。境内に大正８年(1919)に流月庵から村が譲り受けた稲荷神社を合祀している。

⑮潜龍山専法寺

宝暦６年(1756)に赤穂別院妙慶寺の支坊として、仏像を東本願寺から下付されて現在の木生谷集会所の辺りに開基した浄土真宗の寺院。文化２年(1805)に東本願寺より専法寺の寺号を受けた。明治11年(1878)に妙慶寺の末寺として独立、大正３年(1914)現在地に寺坊を移した。平成４年(1992)大改修を行い現在に至る。なお、木生谷では折方の浄専寺の門徒が約半数を占め、専法寺の門徒は約４割である。

⑯流月庵

新田村にあった禅宗の草庵が廃寺となっていたのを、正徳元年(1711)に木生谷出身の新田の大庄屋、三宅政清が現在地に移したのが始まりである。初代の庵主は盤珪禅師に私淑して、網干の龍門寺で修行した政清の娘(安祥慈穏比丘尼)であった。その後龍門寺の末庵となり、信者が参詣して賑わっていたが、昭和54年(1979)に庵主が没してからは、仏像・仏具・位牌は北野中の興福寺に移され、庵も興福寺が管理している。敷地内には観音堂があり、観音菩薩・弘法大師・地蔵菩薩が安置され、播州赤穂坂内33ヶ所霊場の21番札所となっている。庵の裏庭には安祥慈穏比丘尼や三宅氏の墓などがある。

⑰水田・畑跡

木生谷は谷に形成された集落で平地が少なく、平地のほとんどが宅地となっており水田はわずかである。一方、山中に足を踏み入れると、石を積んで造成した水田・畑跡が奥地にまで延々と続いている。木生谷の住人の多くは十分な農地が確保できないため、半塩半農の生活を営んでいた。山中に広がる田畑の跡からは農地を求めて山に通った先人の苦労が偲ばれる。

⑱猪垣

集落背後の山麓には、農作物を猪や鹿から守るために石垣が築かれることが多い。木生谷の猪垣は田畑を囲むように築かれ、総延長は約４kmに及んだと伝わる。猪垣の石積みは近隣の石を用い、農閑期や塩田の採鹹を休む時期(12月～３月)に行われた。現在でも高さ170cmを超える石垣が残っている。

(調査協力：赤松光弘・浅野尚麿・岡田順一・木村繁満・三好信雄・山根郁男)